

【白塔歌仙会第四五回七月々例会】

「百合の丈」の巻 令和六年七月

水切りに日々詰まりゆく百合の丈

七緒

錢苔蔓延るタワマン屋上

恆雄

天と地の夜の輝き愉しめる

和子

次の休みは川舟流し

悦子

角立てて折り紙に似た白桔梗

果穂

月が見えたよ跳ねるウサギは？

笈羅

ウ 二つ星はるか隔てて杵と臼

恆

泉の車両に満男が飛び乗る

七

不真面目なアイツが真面目な恋をした

悦

畑仕事も趣味の一つに

和

本業が遊びの世界それもあり

笈

ラーメン券買う新紙幣にて

果

月凍てる部活帰りの女学生

和

まばゆいばかり大根並ぶ

笈

赤い風車ラインダンスの靴が鳴る

七

ツイッギーは妖しい踊り子

恆

花冷えに熱湯落とす珈琲自慢

果

常連客のスマイレのカップ

悦

ナオ 盃満ちて白魚の柄浮かび立つ

恆

床の間の軸確か虚子の句

和

あれあいつ挨拶したけど誰だっけ

笈

やたら手を振る都知事候補は

七

ヤジ馬も笑って黙殺汗の顔

悦

夏陽に光る小さなシャベル

果

ままごとのママはお昼寝風さやか

和

投票デパートで独裁排除

恆

ラブコール届かぬ周庭、スー・チーに

七

英国領の遙かな香港

果

戦場に残る友あり月いざる

悦

流れ星目に不安もよぎる

悦

ナウ 野分去りもぬけの殻の朝の空

恆

フランスパンを抱えて散歩

和

七年のホテル暮らしをあとにして

悦

帰りなんいざ竹林の里

七

花守が去来に捧ぐ花一輪

笈

踏み心地良きボテイチェリーの春

果

連衆…七緒、恆雄、和子、悦子、果穂、笈羅。

令和六年七月一日首、令和六年七月十二日尾（文音）